

2026. 1. 18 (日) 使徒28:16～22

28:16 私たちがローマに入ったとき、パウロは、監視の兵士が付いてはいたが、一人で生活することを許された。

28:17 三日後、パウロはユダヤ人のおもだった人たちを呼び集めた。そして、彼らが集まったとき、こう言った。「兄弟たち。私は、民に対しても先祖の慣習に対しても、何一つ背くことはしていないにもかかわらず、エルサレムで囚人としてローマ人の手に渡されました。

28:18 彼らは私を取り調べましたが、私に死に値する罪が何もなかったので、釈放しようと思いました。

28:19 ところが、ユダヤ人たちが反対したため、私は仕方なくカエサルに上訴しました。自分の同胞を訴えようとしたわけではありません。

28:20 そういうわけで、私はあなたがたに会ってお話したいと願ったのです。私がこの鎖につながれているのは、イスラエルの望みのためです。」

28:21 すると、彼らはパウロに言った。「私たちは、あなたについて、ユダヤから何の通知も受け取っていません。また、ここに来た兄弟たちのだれかが、あなたについて何か悪いことを告げたり、話したりしたこともありません。

28:22 私たちは、あなたが考えておられることを、あなたから聞くのがよいと思っています。この宗派について、いたるところで反対があるということを、私たちは耳にしていますから。」

<説教>

アドヴェント、クリスマスを含んでおよそ二ヶ月ぶりに「使徒の働き」に戻ります。

その前回は28章15節で終わっていました。エルサレムでユダヤ人たちから死刑にされるべき犯罪人としてローマ政府に訴えられた使徒パウロは、自らローマ皇帝カエサルに上訴しました。それでパウロは釈放されることなく、囚人としてローマの百人隊長に引き渡されました。そのパウロの一行が〈ついにローマにローマに到着した〉(14. 口語訳)のでした。27章の初めから記されていた地中海の船旅は思いもかけないものでした。ユーラクロンという〈暴風に激しく翻弄され〉(27:18)、〈太陽も星も見えない日が続く、暴風が激しく吹き荒れたので、私たちが助かる望みも今や完全に絶たれようとしていた〉(同 20)、そんな命の危険に曝されたものとなりました。また監視役の兵士たちによってパウロたち囚人が殺されそうになったこともありました。その後、マルタ島に漂着して助かりました。そこではパウロはまむしにかみつかれもしましたが何の害も受けませんでした(28:1-5)。このように、パウロに「勇気を出しなさい。あなたは、エルサレムでわたしのことを証したように、ローマでも証しをしなければならない」(23:11)と仰った主なる神、イエス・キリストがウロとともにおられて、パウロを守られました。パウロも主に信頼し、あらゆる困難の中で勇気を失いそうになるときにも勇気を失いませんでした。とは言え、肉体的にも霊的にも非常な困難の中を通されたことには間違いなく、やっとここまで来られたというほっとした思いもあったことでしょう。ローマからパウロたちを迎えに来てくれた兄弟たちと会い、語り合い、お互いに〈神に感謝し、勇気づけられた〉(28:15)

のです。

そうやってローマに入ったパウロは、〈監視の兵士が付いてはいたが、一人で生活することを許され〉(16)ました。これまで見て来たように、総督や百人隊長などローマの役人たちの比較的好意的な態度がありました。そして、困難な船旅中のパウロの神と人に仕える信仰の姿勢が更に彼らに良い印象を与えていたのでしょう。とは言えあくまでも囚人の身です。〈監視の兵士〉とは手が鎖でつながれていて、自由に外に出ることは許されず、ただパウロを訪ねて来る人たちと会い話しをすることが許されたようです。

そんな囚人としてローマで〈一人で生活〉を始めたパウロでしたが、彼は自分がひとりぼっちだなどとは考えてはいなかったと思います。後にこのローマの「獄中」で書くことになる「エペソ人への手紙(3:1. 4:1)」、「テモテへの手紙第二(1:8)」、「ピレモンへの手紙(1. 9)」の中で彼は自分が主なるキリスト・イエスの囚人だと言います。前回の説教の最後のところでも、パウロは勝利者イエス・キリストの囚人としてキリストに連れられてローマに入ったというようなことを私は言いました。確かに本日の箇所(28:17)で彼が言うように彼は〈囚人としてローマ人の手に渡されました〉。しかし「本当に」堅く、絶対に解かれない相手として手と手をつながれていたのは主イエス・キリストでありました。イエス・キリストはパウロの罪のために十字架で死なれ、よみがえられ、昇天され、神の右の座に着き、とりなしていただく方でした。キリストとパウロをつないでいた「鎖」、いわば絆はキリストの御霊、聖霊でした。また、キリストの愛、主キリスト・イエスにある神の愛でした(cf.ローマ 8:26-39)。

さて、そんなパウロでしたから、彼はやれやれやと目的地についた、とそこで気を抜きはしませんでした。そこから「エルサレムでしたようにローマでも主イエス・キリストの証をする」という主から命じられた働きの「本番」でした。続けて神に感謝し、勇気づけられて、〈三日後、パウロはユダヤ人のおもだった人たちを呼び集め〉(17a)ました。そして自分がなぜエルサレムからローマに来ることになったのか、またなぜユダヤ人のおもだった人たちに会って話しをしたいと願ったのかを説明しました(17-20)。そのエルサレムで始まったことは21章17節からずっと記されていたことでした。

パウロは自分が、ユダヤ人とその慣習に対して背くことは何一つしていないのに、ユダヤ人から訴えられてローマ人の手に渡されたと言いました(17)。そしてそのローマ人が自分を取り調べたが、ローマ法律に照らしても死刑になる罪が何もなかったので釈放されそうになったが、ユダヤ人たちは反対したので自分はやむを得ずローマ皇帝に上訴したのであって、自分はユダヤ人たちに何の悪意も持っていないと言うのでした。ユダヤ人の有罪を求めたのではなく、自分の無罪を明らかにすることを求めたのだと弁明しました。そしてわざわざ彼らと呼び集めて話しをした大事な理由を言いました。「何故なら、私がこの鎖につながれているのは、イスラエルの望みのためだからなのです」と。

このパウロの言葉には「自分が今歩んでいる道こそが、神の民イスラエルが本来歩むべき道である」という確信が感じられます。もちろんそれは傲慢でも自分を誇っているのでもありません。このパウロが訴えられた一連の出来事の中で、以前にパウロは「私が神に願っているのは…この鎖は別として、みな私のようになってくれることです。」とアグリッパ王に言っていました(26:29)。それと同じような響きにも聞こえます。要するに、十字架の死とよみがえりのイエスを神の約束の救い主、キリストと信じて罪から救われる

ことです。「神の約束はことごとく、キリスト・イエスにおいて実現した」こと（Ⅱコリント 1:20）こそ、パウロが一貫して宣べ伝えて来たことでした。神が旧約の預言者たちを通して約束なさった〈イスラエルの望み〉とはナザレのイエスに他なりません。また同じくパウロが訴えられた一連の出来事の中で、「私は死者の復活という望みのことで、さばきを受けているのです。」（23:6）とユダヤの最高法院で言い、「私は、正しい者も正しくない者も復活するという、この人たち自身も抱いている望みを、神に対して抱いています。」とユダヤ人と総督フェリクスの前で言いました（24:15）。ですから、〈イスラエルの望み〉とは、〈肉によればダビデの子孫から生まれ、聖なる霊によれば、死者の中からの復活により、力ある神の子として公に示された方、私たちの主イエス・キリストです〉（ローマ 1:3-4）。〈イスラエルの望み〉とは「神・人」で言えば約束のキリストであり、即ちナザレのイエスです。そして「出来事」「神のみわざ」で言えば「死者の復活」です（もちろん十字架の死が絶対の前提です）。

パウロが語ったことに対する〈ユダヤ人のおもだった人々〉の反応（21-22）は、何か「微妙」です。それは、〈この宗派〉とは〈ナザレ人の一派〉（24:5）のことでしょうから、やはり、イエスがキリストであるというパウロの主張を聞き取ってのこのように思います。

しかしクリスマスを通して明らかにされたことは、〈イスラエルの希望〉、イエス・キリストが、その死者の中からの復活が、今や私たちの希望だということです。私たちの罪のために死なれ復活された主イエス・キリストの福音は〈ユダヤ人をはじめギリシア人にも、信じるすべての人に救いをもたらす神の力です〉（ローマ 1:16）。このお方だけに希望のすべてを懸けて、困難を耐え忍び、みことばに聞き従って生涯を歩みましょう。